

れ、山ざきまでに、

つくしづままでに、抄曰、筑紫舟のつく津也、考曰、筑紫舟のつく津の有ていふなるべし、

〔土佐日記〕十一日、○承平五年二月、中略、山崎のはしみゆ、うれしきこと限なし、○中略、十二日、山崎にとまれ

り、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁止強雇往還人并車馬事

右檢案内、○中略、近者山崎大津兩津頭邊諸司諸家人、妄假威勢強雇車馬、因茲行旅之人多煩往還備

賃之輩、已失活計、○中略

貞觀九年十二月廿日

〔日本紀略六〕天祿三年閏二月廿一日辛亥、山崎津鬪亂事出來、放火在家冊餘煙、中矢之者三人、

〔本朝文粹九〕見遊女

江以言

二年三月、豫州源太守兼員外左典廐、春行南海、路次河陽阿陽、則介山河、攝三州之間、而天下之要津也、自西自東、自南自北、往反之者、莫不率由此路矣、

〔朝野群載三〕遊女記

自山城國與渡津、浮巨川、西行一日、謂之河陽、往返於山陽南海西海三道之者、莫不遵此路、○下略

〔山城名勝志六〕河陽或云山崎同所歟

太上天皇

〔經國集賦〕春江賦

仲月春氣滿江鄉、新年物色變河陽、○中略、是以羽族翱翔、鱗群頡頏、續紛雜沓、載來載行、咀嚼初藻、吞茹

新苻、各々吟叫、處々相望、涉人廻櫂、與淵客而爲倫、漁童構宇、接鮫室而同隣、隨波瀾之渺邈、轉舳艫而

尋津、菱歌於是頻沿、沂客子於是不勝春、茲可謂江村春而感於情人也、